

八月のくぼみーまえばし

船越素子

1

その夏、初めてという時間が
朔太郎さんのまえばしで
それは駅前のロータリーから始まる
「熱風の後にー思索は情緒の悲しい追憶にすぎない」
追憶についてはきつと
地方都市だから わたしの街も
台風到来のうわさとともに
フオークナーへとむかってくる
聞こえるのは失われた音の集積
孵化し蠢く蚕や
わたちのざわめき
八月の光がわたしの胸を射る
真昼のからっぽの大通りを
書きかけのサーガを抱きしめ歩く

2

樺の街路樹にひきよせられたのは
肋骨のあたり
燻されていたのだ
汗が したたり落ちてくるといふのに
くるり くぼみを反転させる
台風と気象予報士の
不穏で孤独な手続きがよぎる
ブログでもツイッターでもない
手帖であるべき理由を胸の内で一〇個考える
歩き続けるしかないから そこへは
「広瀬川白く流れたり」

ゴーストタウンなのか
通行人1と3のあとで
4になれないわたしが狼狽えている
尾行するものからも
気にかかる
獣と草いきれの匂いがしたから
(蚊帳吊り草、雄ひじわ、えのころ草、ねじばなも)
猫町を猫足で歩く気配のひとよ

ついとあたりをみわたすと
まだ新しい無人ビルが
みずうみのような
かなしみでみたされている
くぼみが水でみちると
八月の ひたひた
水脈はわたしの胸にたどりつく
いつまで この旅は続くのだろう
そこが曠野であれば
あたらしい光が
また差し込んでくるのだろうか